

日本現代文學

全集

108

現代詩歌集

日本現代文學全集
108

現代詩歌集

講談社

日本現代文學全集

108

現代詩歌集

編集
伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



初版 第1刷
昭和44年8月31日
増補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著者
中野 逍遙
大 手 拓次
西 條 八
尾 崎 十
百 田 八
治
ほか

装 幀 賀 江 征 治

發行者 野間 省 一
發行所 株式會社 講談社

印刷 大日本印刷株式會社
製本 島田製本株式會社

東京都文京區音羽 2-12-21
郵便番 號 112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振替東京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-107083-2253 (1)

(文1)

現代詩歌集 目次

巻頭寫眞

砂 金……………二八

尾崎喜八

田舎のモーター……………四〇

百田宗治

静かなる時……………五三

田中冬二

青い夜道……………六六

八木重吉

秋の瞳……………七五

安西冬衛

軍艦茉莉……………九〇

吉田一穂

海の聖母……………一〇六

中野逍遙

逍遙遺稿抄……………七

詩 篇

大手拓次

藍色の蓑抄……………一〇

西條八十

萩原恭次郎		わがひとに與ふる哀歌	一九
死刑宣告抄	二六	立原道造	
丸山 薫		萱草に寄す	一九
帆・ランブ・鷗	二六	暁と夕の詩	二三
北川冬彦		短歌篇	
戦争	二四	川田 順	
村野四郎		鷲	二五
亡羊記	二五	前田夕暮	
小野十三郎		收穫	二六
大阪	二五	尾山篤二郎	
山之口 貌		草 籠	二六
思辨の苑	二七	土屋文明	
伊東靜雄			

山下水……………三〇

土田耕平

青杉……………三三

吉野秀雄

寒蟬集……………三三

宮柊二

日本挽歌……………三九

俳句篇

飯田蛇笏

靈芝……………三六

水原秋櫻子

葛飾……………三七

西東三鬼

變身……………三〇

中村草田男

長子……………三八

山口誓子

凍港……………四一

加藤楸邨

颱風眼……………四二

石田波郷

雨覆……………四七

作品解説

漢詩篇・詩篇……………伊藤信吉 四三

短歌篇・俳句篇……………山本健吉 四〇

年譜…………… 四七

参考文献…………… 四六

現代詩歌集

逍遙遺稿抄

中野逍遙

可憐子

可憐子兮可憐子、湘江回首雲千里、愛君風
情似春花、愛君胸襟似秋水、遙想綉窓幽夢
凝秋思、朝來向機織錦字、錦字行々無由寄
纖手裂投鵲港水、鵲港之水向北流、流到左
田忽停留、化作黃金峽下金、金光閃々豫海
浮、我上高樓春已老、蜀魂啼長武郊草、武
郊草色連天際、滿地淚痕無人掃、欲依長風
語我心、太平洋水萬尺深、

道情

宿世深緣夢邪幻、百年離合半風沙、一片芳
心滿地恨、秋寒露重女郎花、
百年悲喜總關心、芳黛何時上鸞鏡、一夜夢
魂冷似水、寒庭瘦盡梅花影、

別春夢女史 二首

南風惜歸客、鐵笛吹離思、牽衣約他日、揮
淚憶前時、翠眉纔含秋、蒼鬢忽成絲、風霜
雖殊地、莫乘百年知、孤感明月夜、寒士倚
天涯、

七月暑如此、卿何不暫留、拔釵畫前路、孤
雲落日頭、落日不可招、佳人下玉樓、青眼
一片情、丹心千古愁、長亭復短亭、望斷南
紀州、

秋怨十絕

梧桐葉落下霜初、賓鴈叫愁度砌除、歸鳳求
鳳莫人奏、秋風瘦骨病相如、
誰把芳姿入題詠、梅花魂魄永珠骨、不識纖
蛾得似無、一痕相思在初月、
香銷南國美人盡、霜落東京秋色來、夜半天
風吹桂子、玉琴聲在鳳凰臺、
佳人消息奈蕭條、一片琴心秋寂寥、垂楊明
月驀臺路、馬鬣亂風萬世橋、
鳴鴈何知秋思深、等閑作陣度遙岑、鳴過駿
臺忽飛返、不勝清怨一聲琴、

松間明月照相思、滴下長空鴻雁淚、我吹鐵
笛向高秋、曲裏凋楊盡成翠、
秀才香骨幾人憐、秋入長安夢愴然、琴臺舊
譜爐前柳、風流銷盡二千年、
韓翃難免章臺恨、杜牧長留綠葉歡、人情一
樣各般愁、收向秋燈腸欲斷、
露下笛橫折楊柳、風前琴弄想夫憐、併入悲
秋那耐聽、月明孤鶴落關山、
金鷄百里度關河、木葉蕭々海欲波、傷心一
片悲秋淚、吾與長江可較多、

我所思行

我所思兮上毛人、欲往從之天道屯、城帶山
河風光曠、地均寒熱氣候遵、一家令教修風
儀、廿歲淑德養性純、比君芳山香櫻樹、嫩
葉帶枝地無塵、路通紅霧仙源峽、影蘸碧波
漁郎津、情關情塞千萬里、感慨人對梨花穗、
天漠々兮斗茫茫、一夜何堪斷腸思、
我所思兮駿臺家、欲往從之人事差、東臺南
去萬世橋、一樓風幕蒸絳霞、初評天妃出蓬
萊、忽見瑤階降名花、比君太液白蓮華、仙
莖亭々捧香葩、休說張氏好容儀、却使六郎
羞粉華、情關情塞千萬里、感慨人對梨花穗、
天漠々兮斗茫茫、一夜何堪斷腸思、
我所思兮南氏姝、欲往從之我裳濡、風露滿
天人不見、微聞琴聲洩離隅、行雲忽過鳴雁
下、十三弦上迸冰珠、比君琵琶湖秋月輪、百
里粉色在平壺、影橫紅窗濕胭脂、露落碧光

涵珊瑚、情關情塞千萬里、感慨人對繁花穗、
天漠々兮斗茫茫、一夜何堪斷腸思、

我所思兮貞卿々、欲往從之我馬驚、淨几朝
倚人如玉、歌詠秀調拂太清、煙霞忽飛薛濤
箋、一枝彤管碎水晶、比君富嶽晴雪色、白
扇無際立東瀛、雲逗冷影迫豹窟、花發寒光
壓鳳城、情關情塞千萬里、感慨人對繁花穗、
天漠々兮斗茫茫、一夜何堪斷腸思、

思君十首

思君我心傷、思君我容瘁、中夜坐松陰、露
華多似淚、

思君我心悄、思君我腸裂、昨夜涕淚流、今
朝盡成血、

示君錦字詩、寄君鴻文冊、忽覺筆端香、窓
外梅花白、

爲君調綺羅、爲君築金屋、中有鴛鴦圖、長
春夢百祿、

贈君名香篋、應記韓壽恩、休將秋扇掩、明
月照眉痕、

贈君双臂環、寶玉價千金、一鍋不乖約、一
題勿變心、

訪君過臺下、清宵琴響搖、佇門不敢入、恐
亂月前調、

千里鳴金驚、春風吹綠野、忽發屋頭桃、似
君三兩朵、

嬌影三分月、芳花一朵梅、渾把花月秀、作
君玉膚堆、

書聲入機聲、鶯語交笑語、春風八百街、與
君住何處、

道情七首

擲我百年命、換君一片情、仙階人不見、唯
聽玉琴聲、

長安市中水、總是卓姬香、染上相如筆、交
章萬丈光、

與君住瑤臺、與君分鏡面、欲共百年春、階
前花片々、

双燕巢朱屋、兩鴛棲碧池、上曰共不老、下
曰長相思、

東嶺半輪月、西廂一抹雪、或比君眉清、或
比君肌潔、

紅豆了前契、綠絲繫後緣、花願長生樹、水
思不老泉、

我有菱花鏡、贈君示意濃、猶向夜夢裡、分
明得相逢、

哭花十律

去者蕩々不可留、由來歲月水東流、誤收絕
艷美人淚、枉作俊才奇士愁、木葉應知天地
慘、鴈聲始駭海湖秋、幽魂漠々迷何處、白
雨黑風滿綺樓、

十里悲風吹白楊、遺調猶憶舊琴堂、意中人
去燈無影、恨裏身銷夢有香、楓葉曾題三世
誓、梅花忽亂九迴腸、灑來還是昨朝淚、一

掬何堪向故壇、
一現華雲輒凋歇、堪驚風信太飄忽、三生愛
果綺人詩、百代情緣淑姬骨、纔剩夢魂寄早
梅、微留眉影在初月、傷心曲々永宵簫、咽
送雁聲入岑樾、

一現華雲輒凋歇、堪驚風信太飄忽、三生愛
果綺人詩、百代情緣淑姬骨、纔剩夢魂寄早
梅、微留眉影在初月、傷心曲々永宵簫、咽
送雁聲入岑樾、

一夜雁鳴魂亦驚、千金身命爲君輕、窮呼訴
感衝天響、絕叫伸哀動地聲、烟月傷心渾幻
夢、花風入思半痴情、青々猶繫李門柳、寄
弔當年貞麗卿、

誰共哀歌重倚樓、微茫春色謎眸幽、斜陽別
燕各天恨、古渡離舟特地愁、吹絮東風空斷
夢、宿萍碧水漫延流、聽臻一曲紅芽譜、烏
髮少年忽白頭、

可憐一點梅心負、僅見開花輒落花、廿四春
風吹恨長、十三鴈柱惹愁加、乾坤有淚翻江
雨、天地無情捲塞沙、病裡蕭郎喉忽破、吹
簫吹徹玉姬家、

品批曾推月裏梅、名枝欲安托春魁、列香經
雨崇朝散、寒粉逐風中夜摧、長松猶記斷琴
譜、弱柳漫牽殘鏡埃、縱使威卿詞筆在、一
生不賦茗溪臺、

番風廿四輒堪哀、取次吹愁上碧苔、皇帝奪
將卓氏色、曼天埋沒相如才、只當筆管橫金
闕、空以文章葬草萊、孤鶴夢寒春瘦盡、夜
尋舊曲下琴臺、

哀笛聲々何處迷、寒鴉枝裂不堪棲、馬蹄寂
寞香卿宅、車轍淒涼蘇小堤、可憐南鴻鳴向
北、更傷東水去流西、尋他殘月曉風底、總
是碎紅凋紫泥、

哀笛聲々何處迷、寒鴉枝裂不堪棲、馬蹄寂
寞香卿宅、車轍淒涼蘇小堤、可憐南鴻鳴向
北、更傷東水去流西、尋他殘月曉風底、總
是碎紅凋紫泥、

哀笛聲々何處迷、寒鴉枝裂不堪棲、馬蹄寂
寞香卿宅、車轍淒涼蘇小堤、可憐南鴻鳴向
北、更傷東水去流西、尋他殘月曉風底、總
是碎紅凋紫泥、

哀笛聲々何處迷、寒鴉枝裂不堪棲、馬蹄寂
寞香卿宅、車轍淒涼蘇小堤、可憐南鴻鳴向
北、更傷東水去流西、尋他殘月曉風底、總
是碎紅凋紫泥、

哀笛聲々何處迷、寒鴉枝裂不堪棲、馬蹄寂
寞香卿宅、車轍淒涼蘇小堤、可憐南鴻鳴向
北、更傷東水去流西、尋他殘月曉風底、總
是碎紅凋紫泥、

哀笛聲々何處迷、寒鴉枝裂不堪棲、馬蹄寂
寞香卿宅、車轍淒涼蘇小堤、可憐南鴻鳴向
北、更傷東水去流西、尋他殘月曉風底、總
是碎紅凋紫泥、

哀笛聲々何處迷、寒鴉枝裂不堪棲、馬蹄寂
寞香卿宅、車轍淒涼蘇小堤、可憐南鴻鳴向
北、更傷東水去流西、尋他殘月曉風底、總
是碎紅凋紫泥、

夢抱纏綿覺尙疑，芳魂捨我欲安之，無多身
命輕生死，有有限年華感合離，雨撲紅梅三日
夢，風摧白芍五更枝，長卿從此前途短，歸
鳳曲中恨翠眉，

上州羈旅、感傷十律

歲之甲午春三月，吾憶佳人人上州，縱憶佳
人人不見，巉崑寒石水空流，千年紫鳳飛無
跡，終古白雲去杳悠，忽捲驚沙天咫尺，長
風鬢髮半峰愁，

萬里回頭一浩嘆，忽驚悲颺起天涯，雪盈越
北春猶淺，雲鎖信南日欲斜，千古傷心休對
月，百年多恨忍看花，英雄窮死美人老，絕
世昭君亦塞沙，

紅心忍把烏絲題，滿地哀鶯滿地啼，白雨南
來還北去，黑風東走忽西迷，時平枉奪樂天
弟，世治尙偷韓氏妻，破鏡不收人不起，故
園無處賦歸兮，

長安歸歟歸無宅，多恨相如瘁爽姿，寶劍爲
誰釀其病，青衫因汝誠斯悲，榛名山遠纔醫
骨，四萬泉溫耐浴肌，重誓來遊定何日，願
追慈髻未皤時，

浮世歡樂總紛々，誰數燈前鬢畔銀，同胞回
頭唯女妹，舊遊屈指半他人，天門漢々難消
恨，雲海沈々不釀春，知道帝城花似錦，一
年韶景一傷神，

踏來上野州南北，感慨翻衣向信國，天隔吾
妻絕繡思，地隔佐久淒涼色，紅心帶雨迷孤

村，碧血和煙滴破驛，六里曠原不見家，浩
歌躍入淺間嶽，吾妻上州郡名
佐久信州郡名

立馬碓水第一嶺，吟鞭又入上州境，蒼煙忽
合月無光，白霞俄開樹有影，萬岳暮威爭峻
嚴，千山夜氣含沈靜，鐵蹄不駭下橫川，尙
覺双肩露華冷，橫川上州地名

妙義一千三百尺，孤峯天半忽將落，夙時積
雪潤中凝，太始滯雲山下宿，金洞雞鳴夜未
明，石門欬咄日初赤，風如奔馬霧如濤，嶺
有仙人吹鐵笛，

劒門十里忽歸洛，巴蜀此遊已旬日，百代天
生蘇軾文，千年世誦陸游筆，願成名士葬名
山，誰以秀才許秀骨，回顧雲邊青一絲，峰
眉爲我惜離別，

赤城矗立幾千仞，看到山巔天亦盡，鳥道極
眸絕塞關，猿蹤一路入雲漢，日啣群馬旅思
長，花落館林春景短，猶有双襟沾未乾，百
年此淚白吾鬢，

有感十首

擲地窮呼響，向天絕叫聲，無妻頌苦樂，有
弟隔幽明，哀月和吾恨，悲風吹我情，洞蕭
奏花落，白髮半霄生，

長劍感如何，鬢毛指北斗，地分骨肉親，天
裂心肝友，打鳳枉驚鴻，折桃誰及柳，百年
有鬱憂，不醉浮世酒，

驅馬上中原，金鞭感易繁，無人問王猛，有
客詠桓溫，燈和吟餘恨，風驚醉後魂，開窓

撫雲漢，曙色拂乾坤，

奏了落梅花，莫欲入碧紗，不然我將老，忽
見日方斜，柳氏投巾合，昭君抱琵琶，閑來
千古恨，渾耐一長嗟，

揚々鞭白馬，誰歟慕青雲，驚鳥風中箭，落
花水裡紋，遙琴和病枕，低雨滴愁裙，傳向
卓姬道，長卿癡綴文，

閑去浮世恨，茫々廿七年，渾將燈下淚，莫
上月前絃，人臥南陽地，龍飛昭烈天，鷄鳴
曉將近，孤客未成眠，

不睡慮何事，鷄鳴非惡聲，英雄江左起，大
澤蜀中生，指顧星三點，回看月五更，俯揮
兩行淚，捧入帝皇城，

指星誓三世，生命欲依誰，久欠謝姬咏，空
傳子建詩，國文佐隆治，帝業固洪基，雨路
春天遍，樞中莫繫驥，

昔年渾似夢，今日亦如煙，誰以撐天力，挽
回逆瀉泉，義氣傷將滅，道心悲不傳，欲知
恨多少，白髮丈三千，

歲之廿七年，王正春三月，才士碎紅心，美
人化白骨，星猶照不來，風亦吹將竭，短笛
咽無聲，天寒豺虎窟，

(明治三十八年十一月)

藍色の墓抄

大手拓次

槍の野邊

陶器の鴉

陶器製のあをい鴉^{かわり}

なめらかな母韻をつつんでおそひくるあをがらす、

うまれたままの暖かさでお前はよろよろする。

嘴^{くちばし}の大きい、眼のおほきい、わるだくみのありさうな青鴉^{あをい}、
この日和のしづかさを食べろ。

しなびた船

海がある、

お前の手のひらの海がある。
母^{はは}の實の汁を吸ひながら、

わたしはよろける。

わたしはお前の手のなかへ捲きこまれる。
逼^{つづ}塞した息はお腹の上へ墓標^{はかばか}をたてようとする。

灰色の謀叛^{ぼうはん}よ、お前の魂を火皿^{ひら}の心にささげて、
清淨に、安らかに傳道のために死なうでは
ないか。

黄金の闇

南がふいて

鳩の胸が光りにふるへ、

わたしの頭は醸された酒のやうに薔の花をはねのける。

赤い護謨^{ゴモ}のやうにおびえる唇が
力なげに、けれど親しげに内輪な歩みぶり
をほのめかす。

わたしは今、反省と悔悟の闇に

あまくこぼれおちる情趣を抱きしめる。

白い羽根蒲團の上に、
産み月の黄金の闇は
惱みをふくんでゐる。

うす紅い晝の衣裳をきて、お前といふ異國の夢がしとやかにわたしの胸をめぐる。
執拗な陰氣な顔をしてる愚かな乳母は
うつとりと見惚れて、くやしいけれど言葉も出ない。

古い香木のもえる煙のやうにたちのぼるこの紛亂した人間の隠遁性と何物をも恐れ
ない暴逆な復讐心とが、

溫和な春の日の箱車のなかに狎^なれ親しんで
ちやうど麝香猫と褐色の栗鼠とのやうに
がみあふ。

をりをりは麗しくきらめく白い齒の争鬭に
倦怠の世は旋風の壁模様^{かきよう}に眺め入る。

撒水車の小僧たち

お前は撒水車をひく小僧たち、

川ぞひのひろい市街を悠長にかけめぐる。

紅や緑や光のある色はみんなおほひかくさ

れ、
Silence と廢滅^{はいめつ}の水彩の色の行者のみがう

ろつく。

これがわたしの隠しやうもない生活の姿だ。

ああわたしの果てもない寂寥^{しやくりやう}を

街のかなたこなたに撒きちらせ、撒きちらせ。

撒水車の小僧たち、

あはは豫言の日和が生れるより先に、
つきせないわたしの寂寥をまきちらせまき
ちらせ。

海のやうにわきでるわたしの寂寥をまき
らせ。

羊皮をきた召使

お前は羊皮^{やうひ}をきた召使だ。

くさつた思想をもちこぶおとなしい召使
だ。

お前は紅い羊皮をきたつつましい召使だ。

あの ふるい手なれた銘爐^{めいろ}のそばに

お前はいつも生^い生^いした眼で待つてゐる。

ほんたうにお前は氣の毒なほど新らしい無

智を食べてゐる。

やはらかい羊の皮のきものをきて

すずしい眼で御用をきいてゐる。

すこしはなまけてもいいよ、

すこしはあそんでもいいよ、

夜になつたらお前自身の考をゆるしてやる。

ぬけ羽^はのことさへわすれた老鳥^{おいどり}が

お前のあたまのうへにびつこをひいてゐる。

やけた鍵

だまつてゐてくれ、

おまへにこんなことをお願いするのは面目

ないんだ。

この焼けてさびた鍵をそつともつてゆき、
うぐいす色のしなやかな紙鍵^{かぎ}にかけて、

それからおまへの使ひなれた青砥^{あおぞり}のうへに
きずのつかないやうにおいてくれ。

べつに多分のねがひはない。

ね、さうやつてやけあとがきれいになほつ

たら、

またわたしの手へかへしてくれ、

それのもどるのを専念に待つてゐるのだか
ら。

季節のすすむのはやいので、

ついそのままだにわすれてゐた。

としつきに焦げたこのちひさな鍵^{かぎ}も

またつかひもちがわかるだらう。

美の遊行者

そのむかし、わたしの心にさわいだ野獸^{やぶ獣}の

嵐が、

初夏の日にひややかによみがへつてきた。

すべての空想のあたらしい核^{かく}をもとめよう

として

南洋のながい髪をたれた女鳥^{めどり}のやうに、

いたましいほどに狂ひみだれたそのときの

一途^{いつと}の心が

いまもまた、このおだやかな遊惰^{ゆうだ}の日に法

服をきた昔の知り人のやうにやつてきた。

なんといふあてもない寂しさだらう。

白磁の皿にもられたこのみのやうに人を魅

する冷たい哀愁^{あいしゅう}がながれでる。

わたしはまことに美の遊行者であつた。

苗床^{めいど}のなかにめぐむ憂^{うれ}ひの芽望^{めぞろ}みの芽、

わたしのゆくみちには常^{とこ}にかなしい雨がふ

る。

秋

ものはものは呼んでよろこび、

さみしい秋の黄色い葉はひろい大襟^{おほえだ}な胸に

ねむる。

風もあるし、旅人もあるし、

しづんでゆく若い心はほのかな化粧^{けしょう}づかれ

に遠い國をおもふ。

ちひさな傷のあるわたしの手は

よろけながらに白い狼をおひかける。

ああ 秋よ、

秋はつめたい霧の火をまきちらす。

野の羊へ

野をひそひそとあゆんでゆく羊の群よ、

やさしげに湖上の夕月を眺めて

嘆息をもらすのは、

なんといふ眼合をわたしの心にもつてくる

だらう。

紫の角を持つた羊のむれ、

跳ねよ、跳ねよ、

夕月はめぐみをこぼす……
わたし達すてられた魂のうへに。

憂はわたしを護る

憂はわたしをまもる。

のびやかに此心がどつてゆくときでも、
また限らない瞑想の朽廢へおちいるときで
も、

きつと わたしの憂はわたしの弱い身體を
中庸の微韻のうちに保つ。

ああ お前よ、鳩の毛竝のやうにやさしく
ふるへる憂よ、

さあ お前の好きな五月がきた。

たんぽぽの實のしろくはじけてとぶ五月が
きた。

お前は この光のなかに悲しげに浴みして
世界のすべてを包む戀を探せ。

河原の沙のなから

河原の沙のなから

夕映の花のなかへ むつくりとした圓いも
のがうかびあがる。

それは貝でもない、また魚でもない、
胴からはなれて生きるわたしの首の幻だ。
わたしの首はたいへん年をとつて
ぶらぶらとらちもない獨りあるきがしたい
のだらう。

やさしくそれを看とりしてやるものもない。
わたしの首は たうとう風に追はれて、月
見草のくさむらへまぎれこんだ。

球形の鬼

あつまるものをよせあつめ、
ぐわうぐわうと鳴るひとつの笛のなかに、

やうやく眼をあきかけた此世の鬼は
うすいあま皮に包まれたままでわづかに息
をふいてみる。

香具をもたらししてゆく虚妄の妖艶、
さんさんと鳴る銀と白蠟の燈架のうへのい
のちは、

ひとしく手をたたいて消えんことをのぞん
でゐる。

みよ、みよ、
世界をおしく赤いふくらんだ大足は
夕機のごとく影をあらはさうとする。

ああ、力と闇とに満ちた球形の鬼よ、
その鳴りひびく胎期の長くあれ、長くあれ。

くちなし色の車

つらなつてくる車のあとに また車がある。
あをい背旗をたてたらべ、

どこへゆくのなら若い人たちがくるではな
いか、

しやりしやりと鳴るあらつちのうへを

うれひにのべられた小砂利のうへを
笑顔しながら羽ぶるひをする人たちがゆく。
さうして、くちなし色の車のかずが
河豚のやうな闇のなかにのまれた。

春のかなしみ

かなしみよ、

なんともいへない 深いふかい春のかなし
みよ、

やせほそつた幹に春はとうとうふうはりし
た生きもののかなしみをつけた。
のたりのたりした海原のはてしなさと低く
の方へゆくやうに

ああ このとめどもない悔恨のかなしみよ、
温室のなかに長いもすそをひく草のやうに
かなしみはよわよわしい頼り氣をなびかし
てゐる。

空想の階段にうかぶ鳩の足どりに
かなしみはだんだんに虚無の宮殿にちかよ
つてゆく。

輝く城のなかへ

みなとを出る船は黄色い帆をあげて去つた。
嘴は木の葉の群をささやいて
海の鳥はけむりを焚いてゐる。

磯邊の草は亡霊の影をそだてて、
わきかへるうしほのなかへわたしは身をな

げる。

わたしの身にからまる魚のうろこをぬいで、
泥土に輝く城のなかへ。

銀の足鐙

——死人の家をよみて——

囚徒らの足にはまばゆい銀のくさりがついてゐる。

そのくさりの鐙は、しづかにけむる如く呼吸をよび、嘆息をうながし、力をはらむ鳥の翅のやうにささやきを起して、

これら 憂愁にとざされた囚徒らのうへに光をなげる。

くらく いんうつに見える囚徒らの日常のくさむらをうごかすものは、

その、感觸のなつかしく 強靱なる銀の足鐙である。

死滅のほそい途に心を向ける これらバラツクのなかの人人は

おそろしい空想家である。

彼等は精彩ある巢をつくり、雛をつくり、海をわたつてとびゆく候鳥である。

躁忙

ひやかな火のほとりととぶ蟲のやうにくるくるといらだち、をのき、おびえつ

つ、さわがしい私よ

野をかける仔牛のおどろき、あかくもえあがる雲の眞下に慟哭をつつんでかける毛なみのうつくしい仔牛のむれ

鉤を産む風は輝く寶石のごとく私をおさへてうごかさなない。

底のない、幽谷の闇の嚙にめぎめて偉大なる茫漠の袍衣をむかへる。

つよい海風のやうに烈しい身づくろひした接吻をのぞんでも、

すべて手だてなきものは欺騙者の香餌である。

わたしの躁忙は海の底にさわがしい太鼓をならしてゐる。

みどりの狂人

それをおしながせ、

みどりの狂人よ。

とどろきわたる娼妓のいけすのなかにはねまはる羽のある魚は、

さかさまにつつたちあがつて、歯をむきだしていがむ。

いけすはばさばさとゆれる、魚は眼をたたいてとびださうとする。

風と雨との自由をもつ、ながいからだのみどりの狂人よ、

おまへのからだだが、むやみとはそくながくのびるのは、

どうしたせぬのだ。

いや……魚がはねるのがきこえる。

おまへは、ありたけのちからをだして空をおしながしてしまへ。

朱の揺椅子

岡をのぼる人よ、

野をたどる人よ、

さてはまた、とびらをとぼとぼとたたく人よ、

春のひかりがゆれてくるではないか。

わたしたちふたりは

朱と金との揺椅子のうへに身をのせて、

このベエルのやうな氣ととも、かるくかるくゆれてみよう、

あの温室にさくふうりん草のくびのやうに。

日輪草

そらへのぼつてゆけ、

心のひまはり草よ、

きんきんと鈴をふりならす階段をのぼつて、おぼざらの、あをいあをいなかへはひつてゆけ、

わたしの命は、そこに芽をふくだらう。

いまのわたしはくるしいさびしい惡魔の絹につつまれてゐる。

ひまはり草よ、

正直なひまはり草よ、
鈴のねをたよりにのぼつてゆけ、のぼつて

ゆけ、
空をまふ魚のうろこの鏡は、
やがておまへの姿をうつすだらう。

足をみがく男

わたしは足をみがく男である。

誰のともしれない、しろいやはらかな足を
みがいてゐる。

そのなめらかな甲の手ざはりは、
牡丹の花のやうにふつくりとしてゐる。

わたしのみがく桃色のうつくしい足のゆび
は、
息のあるやうにうごいて、

わたしのふるへる手は涙をながしてゐる。
もう二度とかへらないわたしの思ひは、

ひばりのごとく、自由に自由にうたつてゐ
る。

わたしの生の祈りのともしびとなつてもえ
る見知らぬ足、

さわやかな風のなかに、いつまでもそのま
まにうごいてをれ。

むらがる手

空はかたちもなくくもり、
ことわりもないわたしのあたまのうへに、

錨をおろすやうにあまたの手がむらがりお
りる。

街のなかを花とふりそそぐ亡霊のやうに
ひとしづくの胚珠をやしなひそだてて、
ほのかなる小徑の香をさがし、

もつれもつれる手の愛にわたしのあたまは
野火のやうにもえたつ。

しなやかに、しろくすずしく身ぶるひをす
る手のむれは、

今わたしのあたまのなかの王座をしめて相
姦する。

つめたい春の憂鬱

にほひ袋をかくしてゐるやうな春の憂鬱よ、
なぜそんなに わたしのせなかをたたくの
か、

うすむらさきのヒヤシンスのなかにひそむ
憂鬱よ、

なぜそんなに わたしの胸をかきむしるの
か、

ああ、あの好きなどもだちはわたしにそむ
かうとしてゐるではないか、

たんぽぽの穂のやうにみだれてくる春の憂
鬱よ、

象牙のやうな手でしなをつくるやはらかな
春の憂鬱よ、

わたしはくびをかしげて、おまへのするま
まにまかせてゐる。

つめたい春の憂鬱よ、
なめらかに芽生えのうへをそよいでは消え
てゆく
かなしいかなしいおとづれ。

母韻の秋

ながれるものはさり、

ひびくものはうつり、

ささやきとねむりと大きな花たばのほと
りに

しろ毛のうさぎのやうにおどおどとうづく
まり、

寶石のやうにきらめく眼をみはつて
わたしはかぎりなく大空のとびらをたたく。

草の葉を追ひかける眼

ふはふはうかんでゐる
くさはを、

おひかけてゆくわたしのめ。

いつてみれば、そこにはなんにもない。

ひよりのなかにたつてゐるかげろふ。

おてらのかねのまねをする

のろいのろい風あし。

ああ くらい秋だねえ、
わたしのまぶたに霧がしみてくる。